東医大誌　53(1)：129～130, 1995

研究会報告

第30回
東京医科大学感染症研究会

日　　時：平成6年11月21日（月）
　　午後4時より
場　　所：東京医科大学病院6階　臨床講堂
特別講演：赤痢菌の病原性の分子生物学とそれを応用した新しいワクチン作製の試み
　　東京大学医科学研究所
　　細菌研究部　教授　吉川昌之介　先生
司　　会：嶋田裕之　教授

1　赤痢菌感染実験における大腸粘膜の組織学的検討　—生菌ワクチン投与後の病像について—

東京医科大学病理学第一講座
鳥海昌喜，綿鍋維男，李 敏 炅，西川純子，
鈴木晟幹，嶋田裕之

ワクチン無投与の赤痢発症をみたサル大腸粘膜には，炎症性細胞浸潤が組織内に著明にみられ，出血性偽膜性大腸炎が認められた。さらに，粘膜での粘液成分は殆ど認められず，粘膜内にほぼ散在性にみられる形質細胞は少数で，そのメチルグリーン・ピロニン染色性は，ワクチン投与群に比較して弱い傾向が認められた。電顕的には細胞胞体内のオルガネラにも変性・消失傾向がみられ，特にミトコンドリアではクリスタの消失や膨化傾向がみられた。一方，ワクチン投与後に病原性赤痢菌を投与した大腸粘膜では，杯細胞にＰＡＳ陽性の粘液成分貯留と粘液分泌性の亢進が著明に認められた。また，粘膜内の出血は殆どみられず，炎症性細胞の浸潤や腺上皮細胞の変性・剥離も軽度で，組織全体はよく保持されていた。電顕的には，粗面小胞体の増加を伴う機能の亢進を示す形質細胞の増加が観察された。また，上皮細胞胞体内の各オルガネラの変性などもわずかであった。

2　脳神経外科手術における術後中枢神経系感染例の検討

東京医科大学脳神経外科
鬼塚俊朗，橋本孝朗，高橋　恵，名倉正利，伊東　洋

当科にて経験した術後中枢神経系感染例の特徴について検討を加えたので報告する。対象は平成3年1月より平成6年8月まで当科にて手術を行った716例中術後中枢神経系感染症を合併した25例（発症率3.6％）とした。手術から感染症確定診断までの日数は1～30日，平均10.8日であった。感染症としては髄膜炎21例，硬膜外膿瘍5例であった。原因が明らかなものとしてはV-P shunt感染5例，ドレナージ感染7例，髄液漏7例，骨弁感染2例であった。起因菌を同定出来たのは25例中13例で，Staphylococcus aureus 3例（うちMRSA 1例），Staphylococcus SP 4例とブドウ球菌が13例中7例に認められた。治療は保存的加療のみが13例，膿瘍又は感染源の摘出を行ったものが12例であった。予後は25例中中枢神経系感染症が原因で死亡したものが2例あった。1例は髄膜炎から脳炎を併発，もう1例は髄膜炎から敗血症を併発し死亡した。